

提督&艦娘シリーズ第四弾



暁

の

パールハーバー
真珠湾

南雲・山本聯合艦隊抜錨ス!

著：衛地朱丸

表紙絵：豚たま子

最終決戦の地、真珠湾へ!

実在提督&艦娘でお送りする、ファンタジックバトル小説。
提督&艦娘シリーズ、堂々完結!

目次

序

中枢の怪姫

5

壹

決戦前夜

7

貳

六人目の仲間

18

参

結成！ 地球聯合艦隊

27

四

光と影の融和

40

伍

リメンバー・パールハーバー

59

終

暁の水平線へ

75

後書き

78

本作は、艦隊これくしょん一艦これーを独自解釈した二次創作小説、提督&艦娘シリーズの第四弾です。第一弾、第二弾、第三弾とは主役やヒロインが異なりますので、この本のみでもお楽しみすることができます。
大本の話は続いていますので、前作をお読みになれば、より一層楽しむことができます。

序

中枢の怪姫

「攻撃目標、真珠湾中枢棲姫！ 全長距離戦略爆撃機爆撃開始!!」

米国ハワイ諸島奪還部隊総旗艦アイオワの号令の元、オアフ島真珠湾上空を覆う、銀翼の四発戦略爆撃機。

前世界で空襲を体感した者なら誰しもが忘れもしない、忌まわしき機体。帝都をたった一夜で灰燼と化したあのB・29の大編隊が、島を焼き尽くす勢いで一斉に爆弾を投下する。

「オウツ！ グレイトツ！ 流星はUSA最高の戦略爆撃機ね!!」

真珠湾に巢食う深海棲艦が次々と沈む中、アイオワは歓喜の声をあげる。

深海棲艦との戦いが始まり数年が経つ。その間米国は太平洋上の拠点であるハワイ諸島の奪還には一切動かなかつた。

理由は二つある。一つは、米国に取つての最優先事

項は、パナマ運河の奪還、並びに運河を介した米国両岸のシーレーンの確保。

これが達成できていなければ、例えハワイを奪還したとしても、米国本土との航路の安全が確保できず、背後から撃たれる危険性がある。

そしてもう一つは、深海棲艦の性質。度重なる戦闘により、深海棲艦は倒しても倒しても蘇る存在だというのは、米国でも解明されている。

生半可な攻撃では、徒に戦力を消耗する危険性がある。よって、攻略の際には、圧倒的な物量で捻じ伏せるのが最適であると。

上記の前提条件二つが満たされたため、米国は満を持してハワイ諸島の奪還に乗り出したのであった。

「アア……アツメタブツシガ……モエル……!」
随伴艦は既に沈み、自身も火の海に包まれながら、集積地棲姫は悲鳴を上げる。

「ダガ……!! アツメタウラミ……ハ……ケツシテ！
モエヌ……!!」

割れたメガネの先に不敵な笑みを浮かべながら、集

積地棲姫は真珠湾の海に沈むのであった。

「オウツイエツ！ これでヴィクトリーは目前ね!!」

残すは中枢棲姫ただ一隻のみ。それも満身創痍で、

あとは戦艦の主砲でも沈められると、アイオワを始めとした攻略部隊は、一斉に照準を合わせる。

「ソウダ……シズマヌ……ワレラガウラムハッ！ ケツシテ!!」

既に戦闘能力を喪失したかに見えた中枢棲姫。だが、その眼光が鋭く光ったかと思うと、艦装がみるみると肥大化する。

「ホワット!? ダイナソー!?!」

艦装部分は、漆黒の鱗に覆われた、恐竜のような外見へと変化する。その異形の姿に、アイオワが抱いた勝利はあつという間に飛散する。

「ホロベ……スベテラ……カイジンニ……!!」

偽装部分が上空に向け、大きな口を開ける。すると、口内からは赤白い光が発光し……

「オーマイガツ!?!」

刹那、中枢棲姫艦装より放たれた赤銅色のハイパー

ウラニウム熱線は、B-29の大編隊を一瞬で消滅させるのであった。

「ツ……!! 全艦、エスケープ!!」

直感的に勝機が失われたことを悟り、アイオワは撤退を命じる。

「クハハハ……!! シズメ シズメツ！ カンムストモメ……!!」

中枢棲姫は狂気の呻き声を上げながら、撤退する艦娘たちにも容赦なく熱線を浴びせるのであった。

「……以上が、我が国へ亡命したアイオワより得られた情報だ……」

辛くも中枢棲姫の攻撃を逃れ、単艦W島に辿り着いたアイオワ。その後横須賀鎮守府へと招かれ、真珠湾での惨劇の一部始終を伝えたのだった。

「……」

重い声質で横須賀鎮守府司令長官が語り終えても、会議室は沈黙したままだった。

米国とのシーレーンを回復させるため、日本海軍では連日作戦会議が行われていた。そんな中、ハワイ諸島の現状が判明したのは大きい……絶望しかない状況に誰もが声を潜めるのだった。

「キャッハッ！ やっぱか、やっぱ現れたか!!」

沈黙を破ったのは、英国より援軍として招かれた戦艦レ級だった。彼女は深海棲艦であるだけに、その生態にも当然詳しい。故に、彼女にとって中枢棲姫の凶

悪化は、想定内であった。

「成程なあ。さながら中枢怪姫ってところかい」

あのゴジラを凌駕する熱線を吐くとなると、ゲンシナガトでも太刀打ちできるか怪しいなど、熱血提督は苦笑いする。

「ゴジラ？ あの映画のね」

映画じゃ妹のミズーリもエイリアンとやり合ったけど、現実には映画みたく上手くいかないものよねと、アイオワは溜息を吐く。

「それにしても、ジャパニーズでもグッドアイデアは出ないみたいね。そうなるど、USAはシークレットミッションを始めるしかないみたいね」

「ホワット？ 米国は何を企んでるネ？」

「ミセス金剛ー。USAは……」

金剛の質問に、アイオワは重い口取りで語る。B-29による絨毯爆撃でも効果が見られないなら、USAは躊躇いなく真珠湾に「核」を落とすと――。

「愚かな！ 下手に核を使ってみる！ 中枢怪姫は第二のゴジラになるぞ!」

いくら手が無いとはいえ禁断兵器を使うことは決して許さぬと、長門は強い口調で抗議する。

「長門の言う通りだ。しかし、他に何か手があるかとなる……」

良策が思い浮かばないと、冷静提督は暗い顔をする。

「やれやれ。誰も作戦の一つも思い浮かばねえってか」

ここはやっぱり俺が発案するしかないわなど、聯合艦隊司令長官へと返り咲いた山本五十六は、重い腰を上げながら語り始める。

「何か名案があるのですか、山本長官！」

「名案ってわけじゃねえが……敵は恨みを糧に、より凶悪となって甦る。なら、これ以上恨みをばら撒かないようにする必要はあるってわけよ」

冷静提督の問い掛けに、山本は答える。ハワイ攻略の第一段階。それは、深海棲艦の残存兵力を説き伏せることだ。

「レ級のお蔭で、中南東海域の深海棲艦は沈黙した。

が、北方海域にはまだしぶとく残っていやがる」

まずはこいつを説得し、仲間に向かい入れると。

「無論、簡単なことじゃねえ。だが、やってくれるな、少年！」

「はい！ もちろんです!!」

山本に一任されると会話の流れから察していた少年提督は、悩むことなく凜とした声で即答する。

「いい返事をするようになったな、少年！」

「ありがとうございます。電、今度こそ僕たちの夢を」

「はい！ 叶える時なのです!!」

深海棲艦を倒すのではなく救いたい。そう思っているも、彼女たちの心を救ってあげられてはいない。

嘗て深海棲艦だった空母ヲ級は、正規空母ロナルド・レーガンとして仲間になった。でもそれは、変人

提督の功績で、自分の力ではない。

今度こそ救ってみせるのですと、電は少年提督の手をぎゅっと握りながら、芯の通った声で決意を語る。

「可能なら少年提督の成功を待って次作戦に移りてえところだが……敵さんも待っちゃくれねえ」

故に同時進行で進める必要があると、山本は説く。

「アイオワの話の聞き限り、集積地棲姫は物資だけで

はなく、深海棲艦の怨恨も集めてたみてえだな」

よって作戦の第二段階は、補給路の遮断。具体的にはハワイ島に拠点を築き、中枢怪姫を封鎖するのとことだ。

「上陸作戦は陸軍との共同戦線で、海軍も大発動艇を搭載可能な水雷戦隊を派遣する必要がある」

そして華奢な上陸部隊の護衛は、戦艦部隊が適任であると。

「ヨッシャアツ！ 戦艦部隊となると、当然オレ様の出番だよな、山本のオッサン！」

山本の指名を待つことなく、熱血提督はふてぶてしい態度で名乗り上げる。

「応よ！ 無論だぜ!!」

「ストップ！ アドミラルヤマモト！ ミーも参加させてちょうだい!!」

パールハーバー奪還のアシストをできないのは不本意だと、アイオワは自ら志願する。

「応。アメさんに恩を売っておくつてのは悪かねえ」

そういう意味じゃ、米国艦だけ参加させるのは、援

軍を派遣した英独への配慮に欠ける。そのため、熱血提督の部隊の他にもう一部隊、多国籍艦隊を編成する必要があると。

「この部隊は、渡英経験のあるオメエさんが適任だと思うが、どうよ？」

「お任せください、山本長官。私が上手く指揮を取ってみせます！」

ビシッと敬礼し、冷静提督は山本の指名を受けるのだった。

「そして上陸作戦が完了したところで、最後は機動部隊による攻撃よ!!」

バンッと机を叩きながら立ち上がり、山本は作戦の最終段階を口にする。

「機動部隊か……。儂の手で終わらせなければならぬ、ということの良いののう？」

それまで沈黙を続けていた、第一航空戦隊司令に返り咲いた南雲忠一は、覚悟を決めた声で口を開く。

「応よ！ 正規空母六隻による奇襲攻撃よ!!」

当然、艦隊は単冠湾から出航させると、山本は語る。

「なっ!? まさかあなたは!」

史実そのままのルートを通り再び真珠湾を攻撃しようとするのですかと、冷静提督は声を荒げて問う。

「応よ! 敢えて、史実のルートを通るのよ」

敵さんもまさか堂々と史実ルートを通って来るとは思わねえだろうと、山本は逆に敵の虚を突くことになると豪語する。

「それによお。こいつは一種の儀式みてえなもんだ」

「儀式?」

「『戦争を始めたのは我々だ。故に、我々の手で終わらせる必要がある』ということじゃろ?」

故に、史実のルートを通ることには大いなる意味があると、南雲は山本の意志を汲み取る。

「そういうことだ! 南雲機動部隊は、当然赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴の六人よ!」

真珠湾を攻めるのにこれ以外の編成なぞあり得んだろうと、山本は舞台役者のような大見得切った声色で語るのだった。

「無論、南雲。オメエ一人だけに責を負わせる気はね

え。俺も水雷戦隊を率いて護衛に当たる!」

そう! 真珠湾攻略部隊は南雲・山本の聯合艦隊よと、山本は自らの出陣を口にする。

「聯合艦隊司令長官にまで上り詰めた男が、戦艦も空母も使わねってか! おもしれえ!!」

オレ様はこの作戦に乗ったぞと、熱血提督は真つ先に賛同する。

「やれやれ。少年提督と冷静提督も納得のようだし、横須賀鎮守府としては承諾するしかないようだな」

正直作戦の成功率は低いと言わざるを得ない。しかし、あの山本五十六が満を持して立案したのだ。却下するわけにもいかんと、司令長官は静かに首を縦に振る。

後日、山本の作戦は軍令部の承諾も得られ、ハワイ奪還作戦は発令されるのだった。



一介の司書として通い詰めた、横須賀鎮守府の戦史

資料室。この世界の俺の居場所はここだと、山本は聯合艦隊司令長官になっても軍令部には出頭せず、この部屋で執務をこなしていた。

「さて、後はこいつを誰に渡すかが……」

作戦を遂行するに辺り、着々と準備が整えられている中。山本は手渡されたケツコン指輪をまじまじと眺めながら呟く。

ケツコンカッコカキは、強い信頼と絆で結ばれた者同士でしか発動しない。それ程の間柄になれる艦娘はいるか？

「やっぱ、アイツしかいねえよなあ」

……というのは、愚問であった。山本は指輪を誰に渡すか、既に決めていたのだ。

「失礼します、山本提督！」

そんな時、戦史資料室に特徴的な黒髪ツインテールの艦娘が入って来た。

「軽巡洋艦五十鈴、命令に従い参りました！」

「応！ よく来てくれた。早速だが五十鈴、おめえに渡したいものがある!!」

山本は前置きなく、いきなり五十鈴にケツコン指輪が入ったケースを差し出す。

「えっ!? これってまさか……。いいの？ 私で」

指輪が何を意味するか分かっていただけに、五十鈴は顔を真っ赤にして慌て出す。

「なんでえ。不服か、五十鈴?」

「そつ、そんなつ！ もちろん嬉しいんですけど……。大和とか他に……」

聯合艦隊司令長官の相手に相応しい艦娘はいるですよと、五十鈴はモジモジする。

「大和は熱血提督の嫁だ。俺が寝取るわけにもいかねえ」

そうよ。指輪を渡す相手は、嫁も当然。俺にとつての嫁は五十鈴、オメエを置いて他にはいねえと、山本はハッキリとし声で告白する。

「そつ、そこまで私のことを……?」

想ってるのと、五十鈴は問い返す。

「当然よ！ いいか五十鈴？ オメエは、俺が初めて“提督”として任された船よ!!」

戦艦三笠を始め、生まれてこの方多くの船に乗って来た。そんな中、初めて艦長を任された五十鈴は、自分にとって一番思い入れのある艦だ。

「僅か半年くらいの期間だったけどよお。これで俺もいっぱしの提督よと、オメエに乗った時は息巻いたもんですよ」

だから俺が指輪をやる相手は五十鈴以外にあり得ねえと、山本は改めて告白するのだった。

「嬉しいなあ。提督がそこまで私のこと想ってくれてたんだなんて……」

あの山本五十六も艦長を務めた。それは五十鈴にとっての誇りであった。でも、当の山本はそこまで自分に思い入れはないだろう。

この想いは一方通行。そう諦めかけていただけに、五十鈴は嬉し涙を流さずにはいられなかった。

「ごめんさい。涙で前がよく見えなくなつて……」

提督が指輪をはめてくれる？ と、五十鈴は右人差し指で涙を拭いながらせがむ。

「やれやれ。随分とワガママなお嬢様だな」

しゃーねーなど笑いつつ、山本はゆつくりと五十鈴の左手の薬指にケツコン指輪をはめる。

「あっ！」

するとその瞬間、ケツコン指輪が眩く輝き出した。

「まあ、こうなるわな」

出会って間もない間柄じゃねえんだから、関係はどつくに極まっついて当然だと、山本はかっかど笑う。

「ありがとう、提督。……あのね。私、ずっと思ってたことがあるの……」

「なんでえ、五十鈴？」

「もしもあの日あの時、私がブーゲンビル島にいたら提督は命を落とさなかったんじゃないかって」

山本が最前線を視察中、米軍機の襲撃を受け命を落とした、海軍甲事件。当時の五十鈴は後の防空巡洋艦の改装は受けてはいない。でも、もしその時対空兵装満載の自分がいたら、悲劇は起きなかったと思わざるを得ない。

「それは奢りつてもんだぜ、五十鈴。だが、あの時俺が命を落とさなかったら、こうやって再会することも

なかった」

だから仮定の話でウジウジしてんじゃねえ。未来に向かつて突き進むだけよと、山本は彼なりの言葉で五十鈴を励ます。

「そうね！ 指輪をくれた提督の気持ちに、絶対答えてみせるわ!!」

だから改めてよろしくねと、五十鈴は満面の笑みを浮かべながら戦史資料室を後にする。

(さてと、実はもう一組あるんだが……)

山本がもらったケツコン指輪は二組。一組を五十鈴にあげるののもらった時から腹に決めていた。でもう一組は？

(コイツも渡す相手は既に決まってる。だが、果たして俺にできるのか……?)

五十鈴の時とは違い、神妙な顔をしながら山本は溜息を吐く。恐らくこの世界で最も自分を恨んでいる者と、ケツコンカッカカリできるのかと。



「この店も、今日で仕舞いじゃのう」

横須賀鎮守府内にある食堂。昼食時になると多くの提督や艦娘たちが賑わうこの店も、深夜帯は閑散としている。今はたった一人の客に最後の食事を与えていくところだった。

「そうですね。提督のご飯がしばらく食べられないのは、極めて残念です」

最後の客は、当然赤城。いつもは流れるように大量の飯を食らう赤城も、この日ばかりは一口一口をゆっくりと噛み締めている。

「忘れもせんわい。この世界で初めて赤城と逢ったあの日のことは……」

店全体を見渡しながら、南雲は回想に耽る。

サイパン島で戦死した南雲が目覚めたのは、横須賀鎮守府の一室だった。見慣れた鎮守府の風景。自分は確かに死んだはずだと戸惑う中、横須賀鎮守府司令長官から告げられる事実。

「ここは自分の見知った日本とは違う日本だと聞かさ

れた時も戸惑ったが、何より嘗ての艦艇が少女の姿で転生しておるといふのは、腰を抜かしそうになったのう

俄かには信じ難い話だ。だがもし本当だったら？

南雲の心に走ったのは、罪悪感だった。

「何せ僕は、ミッドウエーで四空母を沈めてしまった張本人じゃからのう」

空母部隊を喪失に至らしめた自分をきつと恨んでいるに違いないと、南雲は艦娘との邂逅を拒む。

「そうして気を病んだまま執務室を出た時じゃったのう……」

「ええ。私が南雲提督と再会を果たしたのは……」

廊下の先から音を立てて近付く、朱色の弓道着を纏った少女。南雲は悟った。彼女こそ話に聞いた艦娘だと

「恥ずかしい話じゃが、僕はビクついて声をかけることすらできなかった。じゃがお主は、僕の顔を見るや否や、息を切らしながら名前を訊ねて来てのう」

お久し振りです、南雲提督！ 少女の口から自分の名前が出て、南雲も聞かざるを得なかった。お主はひ

よっとしてと。

「そしたら、満面の笑みで答えたのう。『お察しの通り、一航戦赤城です！』と……」

凜とした少女の声からは、確かな誇りと信念を感じた。その一言で南雲は理解した。彼女たちは自分に恨みなど抱いていないと。

「僕は怯えていた自分に恥ずかしくなると共に、一気に肩の荷が下りてのう」

心が救われたと、南雲は当時の偽らぬ心境を語る。

「それから僕は考えた。何故僕がこの世界に転生したのかとのう」

山本曰く、転生者には一定の法則がある。それは、「海以外で死んだ海軍関係者」だという話だった。

しかし後に、アルプス山中で墜落死した英国空軍大將トラーフォード・リー・マロリーのような例外も現れ、この説は覆されたといつてもいい。

未だに理由は分からない。ならばせめて、自分を慕って止まないこの娘たちに何かできないかと、南雲は思案した。

「そんなある時じゃったのう。鎮守府の片隅で、何段にも重なった弁当を頬張っておったお主の姿を見つけたのは」

「ええ。あの時は本当に……」

昔のことを思い出し、赤城は少しばかり頬を赤くする。

「昼飯の時間に語り合おうと思っても、お主の姿が見つからんからと探しに行ったらのう」

偶然こそそこそと昼食を食らう赤城の姿を目にしたとのことだ。

「あの時のお主は、親に悪戯が露見してしまった子供のように、実に滑稽じゃったわい」

「もうっ！ あの時の話はやめてください……」

何故人気のないところで飯を食らっているのか訊ねたら、帰って来た答えは、「一航戦の誇りに傷が付く」からだった。

今では考えられないことだが、南雲と再会する前の赤城は、生真面目で誇り高い女性だったという。故に本来は大飯食らいなのだが、公衆の面前で大食いする

のは一航戦の誇りに傷が付くからと、人気のないところで食べていたとのことだ。

「誇りを守ろうとせんがため堂々と食えんのも可哀想だと思つてのう。儂は思つたんじゃ。『だったら、儂が飯を食わせてやろう』と……」

元指揮官である自分が食堂を開けば、敬愛する提督の常連となっているだけだと、誰も奇異な目で見ないだろうと。

「お前を思つて始めた店じゃがのう。続けているうちに、自分が作る飯を食らう艦娘たちの姿を眺めるのが生き甲斐になってきてのう」

こうして命尽きるまで艦娘たちに食事を賄い続けようと思つていたのでそうだ。

「じゃが、そうも言つてられんことになった。深海棲艦が生まれた原因が儂等の所業にあるならば、儂等の手で終わらせねばならん」

それがこの世界に転生した本当の意味じゃと、南雲は決意を表すようにすくと立ち上がる。

「じゃから赤城よ。儂に力を貸してくれ。共に全てが

始まったあの地で、全てを終わらせるのじゃ!!」

そして南雲は満を持して、ケツコン指輪を赤城の左手の薬指にはめる。

「南雲提督。赤城はこの日が来るのをずっと待ち続けておりました。私にとっての提督は、貴方以外にあり得ません……」

これは誓いの儀式。運命を共に歩もうとする提督と艦娘との、永遠の契約。貴方の支えがあれば私は何者にも負けませんと、赤城は誇りに満ちた顔をし、指輪のはめられた左手でピシッと敬礼するのだった。

「提督。指輪の方、本当にありがとうございます。」

でも……」

「でも?」

「“二航戦”は私だけではありません」

自分と同じく数奇な運命を辿り空母へと改装された加賀さん。彼女もまた、誇り高き二航戦の片翼だ。

「そして、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴。この四人を含めての、“南雲機動部隊”です」

ですから、他の五人にも指輪を渡してくださいなど、

赤城はニッコリと微笑む。例え南雲提督が他の艦娘と

ケツコンカッコカリしても、自分が一番には変わりない。その自信があるからこそ発せられる言葉であった。

「そうじゃのう。あの子等も儂の大切な艦娘じゃ。考えておこう」

渡されたケツコン指輪は一組だけじゃが、話を付けて他の娘の分も頂いておこうと、南雲は承諾するのだった。



それから数日後、ハワイ奪還作戦の編成が発令された。

・北方海域攻略艦隊

対北方棲姫部隊

指揮官 少年提督 旗艦 駆逐艦電

随伴艦 航空戦艦山城 重巡洋艦羽黒

駆逐艦連、潮

護衛部隊

指揮官 変人提督

旗艦 正規空母ロナルド・レーガン

随伴艦 軽巡洋艦酒匂、球磨、多摩

駆逐艦卯月、島風

・ハワイ島上陸艦隊

上陸部隊

指揮官 辻政信 旗艦 揚陸艦あきつ丸

随伴艦 軽巡洋艦阿武隈 水上機母艦瑞穂

駆逐艦皐月、大潮、霞

上陸支援前衛部隊

指揮官 冷静提督 旗艦 戦艦金剛

随伴艦 戦艦レ級、アイオワ、ビスマルク

駆逐艦Z1、Z3

上陸支援後衛部隊

指揮官 熱血提督 旗艦 戦艦長門

随伴艦 戦艦大和、陸奥

重巡洋艦足柄、摩耶 軽空母隼鷹

・真珠湾攻略艦隊

主力機動部隊

指揮官 南雲忠一 旗艦 正規空母赤城

随伴艦 正規空母加賀、蒼龍、飛龍、

翔鶴、瑞鶴

護衛水雷戦隊

指揮官 山本五十六 旗艦 軽巡洋艦五十鈴

随伴艦 軽巡洋艦神通

駆逐艦吹雪、夕立、睦月、如月

そうして艦娘たちは抜錨する。始まりと終わりが集う地、真珠湾へ――

大湊警備府で最後の補給を終えた北方海域攻略艦隊は、北方棲姫果食うAL海域を目指し北進を続けていた。

「ぶえええつくしよんクマー！ 物凄く寒いクマー。冬眠したいクマー」

「多摩もコタツで丸くなりたいにゃ……」

マフラーにコートなど最低限の防寒具を整えてはいるが、やはり北方海域の風は身体に染みる。球磨は鼻水を垂らし、多摩はコートのフードを深く被りながら寒さに耐え凌いでいる有様であった。

「この海、とっても懐かしいのです……」

前世での記憶を呼び起こし、電は回想する。MI作戦と並行して行われたAL作戦。電は第五戦隊所属の艦艇として戦列に加わった。再びこの海に戻って来るのは運命かもしれないと、電は感慨耽る。

「電、大丈夫？」

電が寒さに堪えていると思った少年提督は、指揮艦からイヤホン越しに気遣うような声をかける。

「はい。風は冷たいのです。でも……」

「でも？」

「心はとってもポカポカなのです！」

最初から敵を救う作戦に抜擢されたのだ。冷風など躍動感で吹き飛ぶのですと、電の心は今までにないくらい火照っていた。

「うん。僕もだよ。電、君と心を通わせられるようになってからずっと、敵を救いたいと思っていた。もちろん簡単なことじゃないけど、僕たちなら絶対！」

「大丈夫！ なのです!!」

お互いの意志を確認しつつ、艦隊はAL海域を東進する。

「観測機が戻りました。敵影未だ見ず。やっぱり道中の敵は既に倒された後みたいですよ」

周辺海域に零式水上観測機を飛ばしていた羽黒が報告する。

北方海域には今まで何度か艦隊が派遣されていた。

しかし、道中に構える敵艦隊相手に消耗し、北方棲姫の元へ辿り着く頃には満身創痍。満身にダメージを与えることができないまま一方的に撈られ、無残な撤退を繰り返す有様であった。

「でも、そのお蔭で敵さんはいないですし、北方棲姫の編成も判明済みです」

今までの戦いは決して無駄ではなかったのですよねと、潮は歴戦の勇士を褒め称える。

「そーそー。やつばRTA気取って攻略情報無しで突っ込むより、デイリー任務こなしつつまとめ速報やらWikiで情報吟味してからじっくり攻略開始するのが、イベ海域の鉄則よねー」

「漣ちゃん。さつきから何を言ってるのです?」

漣ちゃんは時折訳の分からないことを言うのですと、電は困惑気味だ。

「おうっ！ おうっ！ 電探に反応があるよ!」

そんな時、護衛部隊の島風が敵機を確認した。

「了解。F8F、イジェークト!!」

島風の報告を受け、レーガンは直衛の艦戦を発艦さ

せる。

「ミヤフー。敵さんのお出ましミヤア。全艦輪形陣を組みつつ、対空戦闘用意ミヤア!」

防寒対策の名目で猫の着ぐるみを羽織っている変人提督は、陽気な声で隼下の艦娘に命じる。

「ぴゃあっ！ 酒匂、レーガンちゃんに敵機が近付かないよう頑張るよ!」

空母は中破状態になれば艦載機を飛ばせない。だからそうならないよう対処するよと、酒匂はぴゃあぴゃあ叫びながら機銃を構える。

「ひと、ふた、さん……ざっと見ただけでも二〇〇機は下らないわね……」

正規空母三隻で何とか拮抗状態に持っていける数だ。そんな相手に正規空母一隻で立ち向かうなんて無謀以外の何物でもないわと、山城は溜息を吐く。

「ううん。それでいいよ。目的は敵の殲滅じゃなく、説得なんだから」

制空権を喪失すれば、こちらの砲撃力は大幅に落ちる。つまりは、それだけ敵を誤って沈めてしまう危険

性が少なくなるということだからだ。

「目的は敵の戦闘力を削ぐこと。だから、北方棲姫を傷付けることなく無力化するため、何としてでも撃ち落すんだ!!」

艦載機を失ってしまえば、北方棲姫の攻撃力は大幅に軽減できる。それでも尚彼女の砲撃は強力なのだが、航空兵力を減らしておくに越したことはない。

「敵機視認。防空戦闘、開始」

迫り来る、牙の生えた白き艦載機。迎え撃つレーガンの艦載機は、妖精不在なマロリーの開発した脳波コントロールシステムにより運用されている。

もつとも、元々脳波コントロールは、深海棲艦の技術ではあるのだが。

「でも、頭の中身、違う」

姫級やヲ級ならともかく、護衛要塞は単純な思考によって運用されている。

「だから、ワタシ、劣らない!」

数では負けているがそれを上回る働きをしてみせる、レーガンは意識を集中させる。

「全機、アターック!」

空中で交差する戦闘機群。単調な動作で機関銃を放つ敵戦闘機に対し、レーガンの操るF8Fは戦闘機の間をすり抜けるように回避すると共に、艦攻、艦爆に攻撃を集中させ、次々と撃墜する。

「ワタシ、損害、八機。敵機、撃破確実四六機。残存艦攻、艦爆八四機!」

味方の損害に対し、多数の敵艦載機の撃墜に成功したレーガン。しかし、それでも半数以上が残り、艦隊に飛来する!

「来る! 山城、羽黒! 三式弾装填! 撃ち一方、始め!!」

広範囲を焼夷弾によって焼く面の攻撃によって撃墜しよう、少年提督は命じる。

「言われなくても!」

「行きます!」

上空に向く、山城の三五・六センチ連装砲と、羽黒の二〇・三センチ連装砲。轟音と共に三式弾は発射され、襲撃する敵艦載機を無差別に焼き払う。

「残存三七機！ しつこいわね!!」

三式弾の雨を浴びても尚残る敵艦載機に、山城は舌打ちする。

「それだけ撃墜すれば十分だよ。変人提督！」

「ミヤファー！ 分かっているミヤァー!! みんなー！

せーのっ!!」

「クマー!!」

「にゃっ!!」

「ぴゃっ!!」

「おっ!!」

「ぴょん!!」

さながら動物園の一斉コーラスのようにそれぞれが特徴的な声を発し、高角砲を発射する。

「電、漣、潮、お願い！」

「なのです！」

「はいさっさー！ 対空カットイン発動キタコレ!!」

「うっ、撃ちます！」

少年提督の駆逐艦娘たちも応戦し、次々と敵機を撃墜していく。そうして激しい弾幕の応酬により、全機

撃墜に成功するのだった。

「みんな、お疲れ様。敵の第二次攻撃に備えながら、前進するんだ！」

今の攻撃で、敵艦載機の大部分は撃墜できただろう。まだまだ油断できない。だけど目的を果たすためと、少年提督は艦隊を北方棲姫に向ける。

「オマエタチ……カエレ……!!」

視界に敵影が入るや否や、周囲に響き渡る幼き声。

護衛要塞五隻に守られた北方棲姫の姿がそこにあった。「ついにここまで来た……!!」

艦娘に搭載された小型カメラの映像越しに北方棲姫を視認し、少年提督は深く帽子を被る。ここからが本番だと息を飲み、艦橋を後にしようとする。

「少年提督、行くのね？」

いつになく真剣な声で、変人提督が訊ねてくる。

「はい！ あなたがやったように、僕も彼女の心を救ってみせます!!」

「ミヤァも、レーガンちゃんに指輪をはめて心を通させられるまでに、随分時間がかかったミヤ。少年提督、

キミがやろうとしていることは、ミヤアよりとつても大変なこと」

非武装で拘束された相手に指輪をはめるのと、敵意剥き出しで襲い掛かって来る相手にはめるのでは、難易度が段違いだと、変人提督は指摘する。

「分かってます！でも、僕はやりませす！援護の方、お願いします!!」

作戦の成功を決意しながらピシッと敬礼し、少年提督は戦場に赴くのであった。



「みんな、お待たせ！」

小発動艇に乗り移った少年提督は、自操縦で指揮下の艦娘たちに合流する。

「まったく！敵艦載機の猛攻は止んだけど、相手の砲撃力は健在よ。そんな中出向くだなんてホント」

無謀な人ねと、山城は苦言を呈する。

「無茶は百も承知。でも、君たちが絶対守ってくれる

って信じてるから」

と、はにかんだ笑顔を見せる少年提督。

「その笑顔は反則です。でも、」

心から艦娘を信じてくれる提督だからこそ、ここまで付いて来られました。あなたの信頼には応えてみせますと、山城は光り輝くケツコン指輪に誓う。

「みんな、頼んだよ！」

少年提督の合図と共に、五人の艦娘は小発動艇を囲いながら前進する。

「提督。道は私が切り開きます！あなたから授かった、この力で……!!」

そんな中羽黒が前進し、眼を閉じながら意識を集中させ、指輪の力を発動させる。

「思い出します。私が沈んだ、ペナン沖を……」

あの時は五隻の駆逐艦相手に奮戦し、力及ばず沈んでしまいました。今度の相手は五隻の護衛要塞。数ではあの時と同じ。

「でも、私は恐れませせん。恐怖も絶望も、全てを乗り越えた先に、道は開けるものです……!!」

目を開いた羽黒の心は、透き通った水のように落ちていた。その心そのまま羽黒は攻撃を回避しつつ、砲弾を正確に当て、護衛要塞を尽く大破させる。

羽黒の名前の由来である羽黒山は、山岳信仰の拠点。悟りを開いた修験者のような研ぎ澄まされた五感を以て、命中率と回避率を飛躍的に向上させる。これが羽黒のケツコンカッコカリアビリティ、「明鏡止水」である！

「露払いは終わりました。後は提督の心の成すがままに……」

「ありがとう、羽黒。みんな！」

周囲の障害は取り除いた。後は北方棲姫を説得するだけだと、少年提督は前進を続ける。

「コッチニ……クルナアツ!!」

少年提督を拒絶するように、甲高い悲鳴を上げながら五インチ単装高射砲で砲撃する北方棲姫。

「私の装甲は、戦艦の中では脆い方。でも、提督から授かったこの力があれば……!」

弱点を補うことができると、山城はケツコン指輪を

光り輝かせる。

すると、突然海面に氷柱が生え、敵の砲弾を突き刺し停止させる。山城のケツコンカッコカリアビリティ、「ロッキング・キャッスル」。岩礁や氷柱を発生させることで、敵の攻撃の阻止や包囲を可能とするのだ。

「あなたにはもう、一発も撃たせない!」

山城は北方棲姫を視認し、彼女の周りにも氷柱を発生させ、包囲する。

「ナニコレ!？」

突然の地形変動に北方棲姫は戸惑い、攻撃の手を緩める。

「よし! 最大戦速!!」

その隙を逃さず、少年提督は一気に距離を詰める。

「ジャマダ ジャマー!」

視界を遮られては攻撃もままならないと、北方棲姫は怒り狂いながら氷柱を破壊しまくる。

「今だ!!」

北方棲姫の気が逸れている隙を突き、少年提督は一気に距離を詰める。

「捉えた!!」

そしてついに、少年提督は北方棲姫の眼前に到達する。
る。

「オマエ……ナニシニキタ!? カエレ! カエレ!!」

「帰らない! 君を説得するまでは!!」

激しく拒絶する北方棲姫に対し、一步も退かず説得を試みようとする少年提督。

「カエレ! カエレッター!!」

どうとう痺れを切らし、北方棲姫は少年提督の乗る小発動艇に単装砲を発射する。

「司令官には……一步も触らせないので!!」

そんな時、電がケツコンカッコカリアビリティ、
“プラズマスタン”を発動させ、弾丸を制止する。

「電は、司令官を傷付けさせないのです! でも……
あなたも傷付けないのです! だから!!」

どうか話を聞いてくださいと、電もまた説得を試みる。

「ウルサイ! カエレ! カエレ!!」

北方棲姫は二人の説得にまったく耳を貸さず、拒絶

し続けるだけだった。

「北方棲姫、君は寂しさを紛らわせるために強がって
るだけだ!」

「!?」

「君は多分、ダッチハーバー基地で戦った人たちの怨
念が基になっているんじゃないかな?」

A L作戦でダッチハーバー基地は損害を受けたけど、
基地は守り切った。でも、アツツ島、キスカ島は占領
された。それは、米国における初の自国領土の喪失。

米国にとつてアリューシャン方面は重要拠点じゃな
かったから、奪還も後回し。島々を取り戻したくとも
取り戻せない歯痒さから君は産まれたんじゃないかと、
少年提督は指摘する。

「チガウチガウチガウ!」

必死に否定する北方棲姫だが、言動には明らかな動
揺が見られた。

「本当は仲間に頼りたい。助けて欲しい。けど……」

仲間は戦力を立て直すため、真珠湾へと撤退。君は
陸上基地型深海棲艦の宿命として、この地から離れら

れない。

「寂しさで悲しむ姿を見られたくない。だから僕たちに帰って欲しいんだろう？」

「チガウ!!」

「違うの？ だったらなんで帰って欲しいんだい？」

「!? ソレハ……」

確信を突かれ、北方棲姫は言葉詰まらせる。

「うん！ やっぱりそうなんだね!!」

北方棲姫の心の氷壁を融解させるように、少年提督は慈愛に満ちた笑顔を見せる。

「ソウダ……サビシイ……サビシインダ……」

一人ぼっちで基地としての宿命に捕らわれ続けていることにと、北方棲姫はポロポロと涙を流す。

「ありがとう。君の本音を聞かせてくれて……」

北方棲姫から敵意が消えたことを悟った少年提督は、ゆっくりと近づく。

「だけど、もう悲しむ必要はないよ。君は一人ぼっちじゃない。僕たちが、君の友達になってあげる」

そうして少年提督は、北方棲姫の目の前でケッコ

指輪が入ったケースを開けるのだった。

「コレハ……？」

「君と僕との友情の証。受け取ってくれないかな？」

「ユビワ……トモダチ……ウン……!!」

この人になら付いていける。そう思ったのだろう。

北方棲姫は満面の笑みで、少年提督からケッコ指輪を受け取るのだった。

「ユビワ……キレイ……ネエ？ トモダチニナツタラ、

アソンデクレル？」

少年提督と心が繋がった北方棲姫は、もじもじと訊ねてくる。

「うん。君が遊びたい時遊んであげる。でもその前に……」

僕の仲間たちに君を紹介しなきゃと、少年提督は北方棲姫の腕を引っ張り帰投するのであった。

◇ ◇ ◇

「ミヤフー！ ついにやってのけたんだねー!!」

指揮艦に戻ると、少年提督の戦果を変人提督が褒め称える。

「流石はご主人様！ 伝説のポケモンをモンスターボールでゲットするような手際の良さです！」

敵影はなく、他の艦娘たちも指揮艦に帰投し、少年提督たちを迎えるのだった。

「相変わらず何言ってるのか分からないけど、ありがとう漣」

「ところで提督。名前はどようしましょう？」

北方棲姫というのは、人間側の呼称。仲間になったのだから何かしらの名前を与えた方がいいのではと、潮が指摘する。

「うーん。名前かあ……」

説得することで頭がいつぱいで全然考えていなかったと、少年提督は思い悩む。

「シユッサンカッカカリした時、何かの船、なるかもだから、」

ワタシがヲ級ちゃんと呼ばれていたように、今の名前の愛称でいいんじゃないかなど、レーガンは指摘す

る。

「北方棲姫ちゃん……だと、ちょっと呼び辛いかなあ」

「だったら、『ほっぽちゃん』はどうでしょうか？」

これだと可愛い呼び方なですと、電は提案する。

「ほっぽちゃんか。うん、いいと思うよ。君はどうかな？」

少年提督は頷くと共に、北方棲姫に確認する。

「ウン……ほっぽちゃんデ、イイ……」

北方棲姫は嬉し恥ずかしい顔でこくこくと頷く。

「ほっぽちゃんが なかまにくわわった！ テテテン

♪ テテテン♪ テレレレテテテン♪」

こうしてほっぽちゃんを仲間に加え、ようやく六隻編成の艦隊となった少年提督。

そして少年提督たちは作戦成功を喜ぶ暇もなく、真珠湾へと針路を向けるのであった。